

コンピュータ世代に

工学部 遠藤 勝義

近年のOA (Office Automation)、FA (Factory Automation)、LA (Laboratory Automation) に見られるように、コンピュータのハードウェア、ソフトウェア両面にわたる進歩は、あらためて言うまでもなく、目を見張るものがあります。それと同時に、最近の若い人たち（もちろん私を基準にしてですが）のコンピュータへの対応の仕方の変化にも興味深いものがあります。

私が大学に入学した当時（昭和51年）は、電子式卓上計算機いわゆる電卓が広く出まわるようになった頃でした。そのころの電卓は、プログラマブルなものはまだまだ高価で、関数機能を競い合っていました。学生実験のレポートを書くときに、実験結果を最小2乗法で1次関数に近似する場合でも相当な努力が必要であったことが記憶に残っています。もちろん、手まわしの機械式計算機を使っていた頃を考えれば、随分楽になっていたでしょう。そのうちに、プログラム電卓が大はやりになり、パーソナルコンピュータもそろそろ市販され始めました。当時個人で購入できるものは、基板むき出しのボードコンピュータが主流で、APPLEやPETは話聞くだけで雲の上のものでした。したがって、私が最初にプログラマブルな電子計算機に本格的に接したものは、例にもれず大学の4年になってからでした。もちろん、FORTRAN言語でプログラムを作り、パンチカードを介したバッチシステムを利用していました。短いプログラムでも、プログラムシートに一度書いて、それから入力するという習慣は、TSSを利用しキーボードから直接入力するようになっても続いています。

一方、最近の若い人は、プログラム電卓と言えば、BASIC言語が利用できるいわゆるポケットコンピュータであり、個人でパーソナルコンピュータを持っている者も多くなりました。Videoゲームもパーソナルコンピュータの普及に一役買ったと思います。早くからBASIC言語に慣れているため、2、3日勉強すれば、FORTRAN言語も一通り理解できるようになるようです。また、パーソナルコンピュータを一度は経験しているため、キーボード入力にも慣れていて、私のようにプログラムを一旦紙に書いて入力するような手間はかけないようです。これらの現象は、その人の能力と言うよりは、コンピュータが発達し、普及したことによる影響が大きいと思いますが、その対応の早さには、いつも感心させられます。20年もたてば、生まれた時から手近にコンピュータがあるといった世代が大学に入ってくるようになるわけですから、世の中も大きく変わっていくでしょう。

しかしながら、このようにコンピュータが普及し、誰もがコンピュータに接するようになってきている中で、やはり気にかかることがあります。一部で、コンピュータは人間のような思考は絶対にできないわけがないと言ってコンピュータそのものに背を向ける人がいます。また、逆にコンピュータの虜となって、昼も夜もコンピュータとつき合うことで、正常な人間関係を保てなくなるような人もい

ると耳にします。どちらも極端な例ではありますが、今の学生にもこのような傾向が見られるようです。たとえば、コンピュータと名の付くものはわけがわからないものと最初から決めつけて、触ろうともしない者がいるかと思えば、研究のテーマでも何でもコンピュータを使うと聞いただけで飛びつく者もいます。このような、新しい道具が現われたときの人間側の過剰反応は、いつの時代にも経験されることではありますが、コンピュータがこれだけ世の中に定着してきたのでありますから、そろそろ落ち着いて見直す必要があると思われまます。つまり、コンピュータというのはあくまで道具であって使用者にとっては、コンピュータを使うことは手段であって目的ではないという冷静な眼が必要でないかと思ひます。たしかに、コンピュータを自由自在に操れるようになるには、かなりの努力が必要でありますが、それだけにとらわれて本来の目的が見失いがちになっているのではと。杞憂であれば幸いです。